

おいしい水で、「ありがとう」がふいに。「いっへ」。

水の話……一八二五

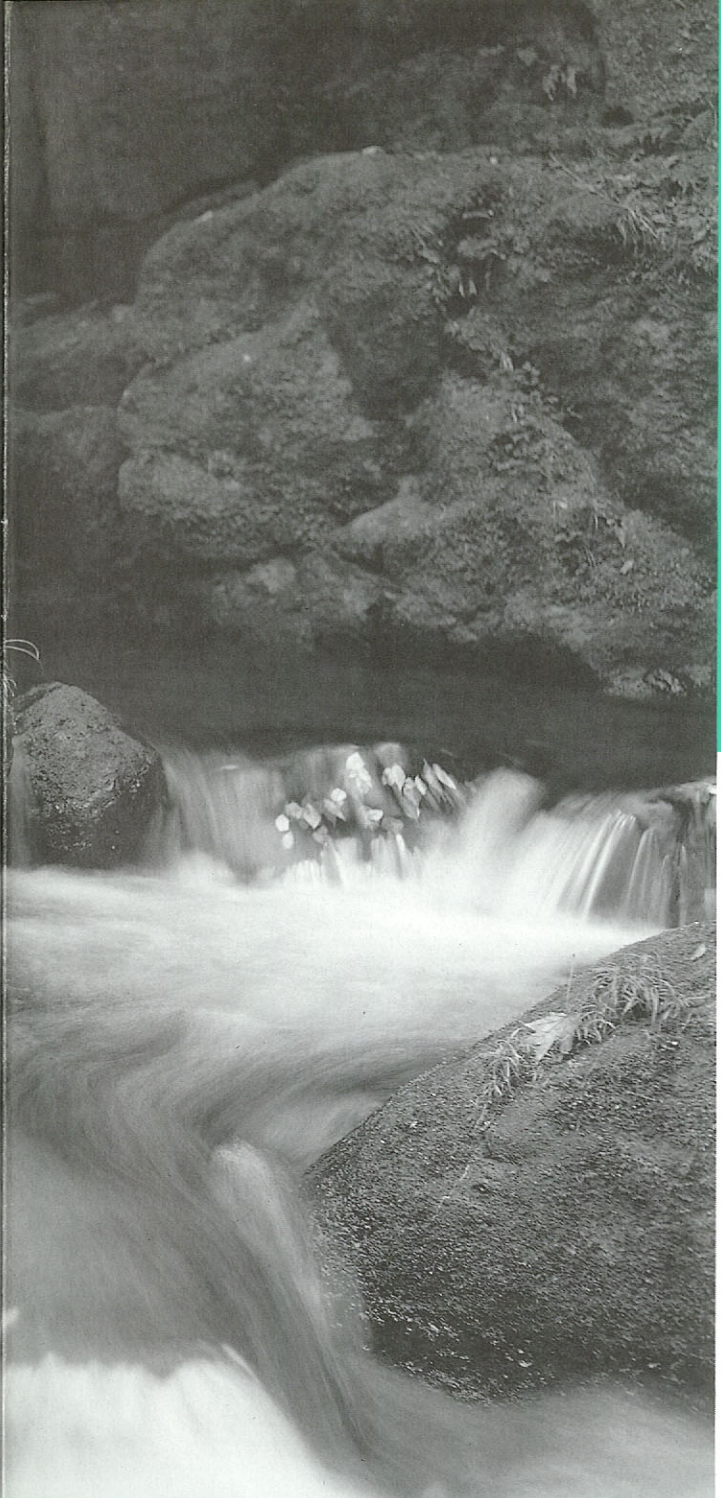
辺田見村支配役、光永直次が植林の事業を起こしたのは文化十二年（一八一五）のことである。この土地の人々は毎年、水不足に苦しめられていた。近くの八勢川は水量が少ない。なにしろ上流は、森林のない草原ばかりの山々である。直次は郡奉行と相談して大規模な事業に着手した。村人が総出で木を植える。弘化四年（一八四七）までの二十二年間に二百四十万本植え、さらにその子直治が植え継ぎ、慶応三年（一八六七）まで事業は続けられた。

こうして八勢川の上流はうっそうたる森林に変わり、川の水量は年々豊かになっていった。土地の人々は水路を引き、数百ヘクタールにも及ぶ水田を開いた。

.....

嘉永用水と呼ばれるこの水路は、上益城郡御船町に残っています。今でも多くの水田を潤し、生活用水としても活用されているこの水路は、土地の人々にとってなくてはならない存在。先人たちが多くの労力をかけて残してくれた大切な遺産なのです。

▼参考文献／水の旅 富山和子



水の話……一九八八

夏の朝は早い。辺りが白々と明け始める午前五時。熊本市の水前寺公園は、ジョギング姿の人達でいっぱいです。ラジオ体操やジョギングなどでひと汗かいた後は、みんな公園の一角にある出水神社の「袈裟紋の水盤」へ直行。こんこんと湧き出す水を、ひしゃくですくって飲む。おいしさに、ほっとひと息。

「毎日一時間かけて歩いて来ます。この水はうまかです。その上、体に良い。お陰でカゼひとつひかんです」ととても若々しく見える八十三歳のおじいさんは、そう言って笑いました。

.....

熊本県は水道用水の77%を地下水に依存しています。これは全国平均の22%に比べ、ダントツの数字。特に人口56万を擁する熊本市ではその100%をまかなうなど、全国でも稀に見るほど地下水に恵まれた土地柄なのです。また、厚生省が設置した「おいしい水研究会」においても熊本市の上水道がベスト3に選ばれたり、県内の2ヶ所の水源の水が銘水として商品化されるなど、質の面でも常に高い評価を受けています。

この良質の地下水は、どうやって生まれて来るのでしょうか。阿蘇の火山山麓に降った雨水は地下浸透の途中でローム層（火山灰土）によって不純物がろ過され、土壌中の礫物が少しずつ溶け込みます。また、水中の有機物は微生物によって浄化されます。こうしてミネラル分をたっぷり含んだ、おいしい水が生まれるのです。また、地下水を含みやすい凝灰岩層の下には、水を通さない固い岩盤があつて、ちょうど巨大な水がめの役目を果たしているのです。こうして、再び地表に湧き出す地下水は、早くても数ヶ月、長いものになると数百年という時を経ています。まさに、大自然がじっくり時間をかけて磨き上げてくれた名水ということができそうです。

さて、いよいよ夏も本番。水遊び、打ち水など、何かと水と接する事が多くなる時期です。普段何気なく使っている水の大切さ、ありがたさを見直し、上手なつきあいをもう一度考えてみませんか。

